保育者養成課程における「日本語表現」での振り返り活動について — 学期末レポートの記述に着目して —

A study of the reflective activity of “Japanese expression” in a Child care worker training course.
— An analysis of term papers —

菊田 尚人
(非常勤講師)

要旨 本研究は、保育者養成課程における基礎的な日本語力の育成に関わる科目を学生自身がどのように蓄積し、意味付けているのかについて明らかにしたものである。先行研究で指摘された「言語生活の省察」「国語学習やことばの力についての確かな認識」「国語学習の推進力」「国語教室へのしたしみ」という四つの観点から、学期末レポートの記述を分析し、保育者養成課程の学生による振り返り活動の様相を明らかにした。それにより、基礎的な日本語力の育成に関わる科目の中で、振り返り活動を設定する際に有効な二つの知見を得た。第一に、「日本語表現」という直接的に保育者としての専門的な技術の育成とは結びつかない科目であっても、保育者になるというキャリアに対する意識が振り返る際の視点となっていること。第二に、短期大学生でも複数の学習内容をマクロな視点から捉えるような振り返り活動では、個々人の認識の程度によって記述に違いが見られることである。

【キーワード：保育者養成課程 日本語表現 振り返り活動】

I. はじめに

大学や短期大学の保育者養成課程において、基礎的な日本語力を育成する科目の重要性が指摘されている。¹ そういった変化に伴い、保育者養成課程の学生に必要な日本語の知識や技能とは何かといった指導内容、それを育成するための指導方法に関する研究が進められている。例えば、指導内容を明確化するための基礎的研究として、学生の書くこと^{2,3} や話すこと⁴ に関わる学力の様相を明らかにした研究、養成課程において実際にどのような指導が行われているかという現状を明らかにした研究⁵ などがある。また、情報リテラシー教育⁶、漢字指導⁷、意見文指導⁸、作文指導^{9,10} といった特定の指導内容に対する指導方法の研究もある。

ただし、そうした科目において、学生が一連の学習をどのように意味付けているかという振り返り活動に関する研究は少ない。国語教育では児童・生徒が学習をどのように意味づけているかについて関心が持たれている一方、保育者養成課程の学生についてはあまり取り上げられていないのである。国語教育では、竜田徹によって児童・生徒が国語学習を意味づけることの重要性が指摘され、その在り方も検討されている。竜田は、「ある単元を国語学習としてとらえなおし、国語学習としての意義を自己評価するという活動は、学習者がこ

とばを学ぶことの本質や価値を発見するための足場となるだろう」¹¹ と指摘し、高等学校での実践研究を通して生徒が持つ目標意識の様相を明らかにしている。国語教育の領域で上記のような研究が進められているのに対して、保育者養成課程の学生を対象とした研究は不十分であるといえる。

そこで、本研究では、保育者養成課程における基礎的な日本語力の育成に関わる科目の学習を学生自身がどのように蓄積し、意味付けているのかについて明らかにする。振り返り活動の様相を明らかにすることから、そうした科目で振り返り活動を行う際に有効な知見が得られると期待される。

II. 方法

本研究では、S短期大学の「日本語表現」という科目で課した学期末レポートを分析し、半期の学習活動を学生がどのように意味づけているかについて明らかにする。

「日本語表現」は、基礎的な日本語力の育成を目的として一年次の必修科目に設定されている。この授業の特徴は三点ある。第一に、一クラス20人ほどの少人数で構成されている点である。第二に、日本語検定委員会編『日本語表現 I (入門編)』というテキストを用いている点である。このテキストは日本語検定試験で設定されている「敬語」「文

法」「語彙」「言葉の意味」「表記」「漢字」という六領域の解説及び演習問題によって構成されている。このテキストは受講者全員が購入することになっており、授業もこのテキストに基づいて進められる。ただし、発展的な内容として、「優しさとは何か」という課題でエッセイを作成する活動と母校の教師に近況報告の手紙を書くという活動も行っている。第三に、春と秋で二回ないし一回、日本語検定協会が実施している日本語検定試験を受験し、目標とする級に合格することを科目の目標の一つとしている点である。あくまで保育者に必要な基礎的な日本語力の習得が目標ではあるものの、学生の意欲喚起や基礎的な学力保障の観点から、毎年取り組んでいる。

分析対象として用いる資料は、学期末に課したレポートの記述である。このレポートは「この学期で学んだことや考えたこと、後期頑張りたいことなどを振り返って書くこと」という指示のもとで書かせたものである。課題の提示以外では、毎時間の授業で書きためていた振り返りの記録¹²を見ながらまとめるように指示しただけで、著者による働きかけはしていない。本研究では、二クラス44人の内、回収することができた36人分のレポートを資料として用いる。

分析の枠組みは、竜田徹が高等学校での実践を通して明らかにした「目標意識の内容」¹³に関する四項目を用いた。竜田が、「振り返りを書く過程で教師が学習者にめざすのは、〈言語生活の省察〉、〈国語学習やことばの力についての確かな認識〉、〈国語教室へのしたしみ〉、そして〈国語学習の推進力〉である」¹⁴と述べているように、目標意識の様相は四項目に分類できる。本研究では、上記の四項目を分析のための枠組みとして用いることで、その内容が保育者養成課程の短期大学生による振り返り活動でどのように表出されているかについて検討する。

Ⅲ. 結果と考察

1. 「言語生活への省察」に関する記述について

「言語生活への省察」¹⁵に関する記述は36人中14人の振り返りに見られた。

その特徴として、保育者になるという自身のキャリアに結びつけて「日本語表現」での学習を意味づけていることがあげられる。振り返りを記述す

るにあたって、保育士・幼稚園教諭として働いている将来の自分を取り巻く言語生活が念頭におかれているのである。該当する記述を抜粋して以下に示した。

- これから保育者として子どもと関わっていく上で日本語や言葉づかいは一番大事になっていくので後期の授業でももっと詳しく学んで、正しい日本語を使えるように、勉強を頑張っていきたいです。
- アイメッセージはこれからの人間関係にとっても必要になる大切なものだと考えました。主語を「私は」にしてみることで、自分の気持ちや考えを相手に伝えることで自分の発言に責任を持つことができ、相手にも気持ちが伝わりやすいのだと分かりました。保育士になったときにアイメッセージを使い、子どもとの関わりを深く持てたらと思いました。
- 手紙は、これから私たちは実習に行き、実習のお礼の手紙なども書く機会が増えていくと思うので、授業で学んだことを生かして書けるようにしたいなと思いました。
- 後期も、今後保育園や幼稚園で働くようになって役立つように頑張っていこうと思います。

これらの記述から、保育士・幼稚園教諭という将来の職業との関連において「日本語表現」での学習を意味づけている様子が分かる。保育者になるという自身のキャリアが振り返りにおいて強く意識されているのである。具体的には、「これから保育者として子どもと関わっていく上で日本語や言葉づかいは一番大事になっていく」や「保育士になったときにアイメッセージを使い、子どもとの関わりを深く持てたらと思いました」といったように、保育士・幼稚園教諭の仕事を構成する様々な要素の中で、子どもと接するというコミュニケーションの側面に注目し、そのために必要な日本語の力として「日本語表現」での学習を捉えている。つまり、保育者として働くにあたって言葉が重要な役割を担っていると認識し、その力を育成するための機会として「日本語表現」の学習を捉えているのである。そういった認識を背景として、「後期も、今後保育士や幼稚園で働くようになって役立つように頑張っていこうと思います」というよ

うに、今後の学習に対する見通しを持っている。さらに、「これから私たちは実習に行き、実習のお礼の手紙なども書く機会が増えていくと思うので、授業で学んだことを生かして書けるようにしたいなと思いました」というように、保育士・幼稚園教諭になる過程で「日本語表現」で学習したことがどのように活かせるかを考察しているものもあった。保育者になるという目標を軸として、「日本語表現」と他科目の学習を主体的に関連づけているのである。

保育者に限らず社会人として生きていく上で「日本語表現」の学習がどのように意味づけられるかについて記述しているものもあった。以下がその抜粋である。

- 日本人として正しい日本語を使って、すてきな女性になりたいと思いました。年上の人や目上の人への敬語にも気をつけ、学んだことをいかしていきたいと思います。
- 日本語は、これからの生活の中で、とても大切だと思うので、これからもたくさん覚えたことを、実践していけたら良いなと思いました。敬語はこれから使うようになってくると思うので、今後も正しい使い方ができるように復習を頑張りたいと思いました。
- 社会人になる前に、きちんとした言葉づかいを使わないといけないなと実感させられました。

「日本人として正しい日本語を使って、すてきな女性になりたい」、「日本語は、これからの生活の中で、とても大切」、「社会人になる前に、きちんとした言葉づかいを使わないといけないなと実感」といったように、短期大学を卒業して一人の社会人になるという視点から「日本語表現」での学習を捉え、その価値について認識していることが分かる。

このように、保育者になるというキャリアに対する学生自身の意識が反映した形で、言語生活と「日本語表現」での学習が関連づけられていることは、保育者養成課程に特徴的な振り返り活動の様相だといえる。なぜなら、教師があえてキャリアとの関係を強調したわけではなかったにもかかわらず、将来保育士・幼稚園教諭になるという自身のキャリアを踏まえて、「日本語表現」での学習を

意味付けていたからである。学生自身がキャリアに対する高い意志をもっていることに加えて、そういった自身のキャリアを意識する機会が多い保育者養成課程という環境を反映した特徴的な振り返り活動の様相だといえる。

2. 「国語学習やことばの力についての確かな認識」に関する記述について

「国語学習やことばの力についての確かな認識」¹⁶に関する記述は36人中34人の振り返りに見られた。

ただし、一連の学習に対する個々人の認識の程度によって、その記述内容は多様なものとなった。記述の仕方に着目すると、個別の学習内容に対する自己の取り組みを羅列したもの、半期の学習全体を総合的に捉えたものという二つに大きく分けられ、一連の学習をマクロな視点から意味づけるような振り返りは少なかった。前者が34人中25人だったのに対し、後者は12人であった。このような違いが生じた理由として、本研究で取り組んだ振り返り活動が複数の学習活動を経た上での総括的なものだったことがあげられる。それらをどのようにまとめることができるかという認識の程度によって違いが生じたのだと考えられる。

それぞれの記述について詳述する。

個別の学習内容に対する自己の取り組みを羅列したものには、どのような学習活動に取り組んだか、それを通して学んだことや考えたことは何かといった記述がそのまま並べられている。以下がその抜粋である。

- 前期の授業を振り返って、正しい敬語の使い方を学ぶことができました。敬語は苦手で中学校や高校のテストに出たときは覚えていてもすぐに忘れてしていました。なので敬語の基本をもう一度確認ができて良かったです。また、「自分にとって優しさとは何か」について考えたときに、日本語の難しさを感じることができ、優しさについて深く考えることができました。
- 初めての日本語表現では敬語について覚えていることをグループで話し合い、みんなで意見を出し合い「です」「ます」「ございます」「でした」などができました。敬語では、海外にもあるということを知ってびっくりしました。そ

して敬語には「尊敬語」「謙讓語」「丁寧語」があるので使い分けや見分けができるか最初は不安でしたが、今思うと少しはできるようになったのではないかと思います。そして4回目の授業では手紙の書き方と送り方について学びました。そこで大切なのは自分ことだけを書くのではなく、相手へ思いやることを書くことを知りました。私は高校の先生に手紙を書きましたが、かたくるしく書くことが少しはずかしかったのを覚えています。今思うときちんとした言葉で大学でも頑張っているということをちゃんと伝えておくべきだと考えました。そして一番印象に残っていることは日本語検定です。私は国語、文法、漢字が小学校の時から得意ではありませんでした。しかし、周りの友だちや先輩に話を聞いたら「落ちる子は少ないから受かるよ」などといったアドバイスを受けましたが、私は苦手なので人一倍頑張ろうという気持ちで必死に勉強をしたことを今でも覚えています。そして、結果が返ってきたときは受かっていたのでとてもうれしく感じました。私は達成感としてうれしいという感情が生まれました。勉強をして本当に良かったと心の中でも思っています。

- 第一回目で私は日本人として正しい日本語を身につけたいと書きました。これまで、日本語の敬語などはやったことはありましたが詳しくは、分かりませんでした。第2回、3回ではグループ活動を行い、グループによっては、考え方が違ったり、たくさん意見がでて、楽しかったです。4回、5回では高校の先生に手紙を書きました。季節や月ごとに、時刻のあいさつが違く、もっと知りたいと思いました。手紙は授業ノートとかではなく相手に贈る物なので字の汚さや丁寧さがいいことを改めて知ることができたので、きれいに書かなくてはと感じました。それからは、日本語検定のために問題集をひたすらやりました。

取り組んだ内容とそれに対する感想や意見というように、同じ構造を持つ記述が並んでいることが分かる。一つ目の記述の場合、「正しい敬語の使い方を学ぶことができました」と取り組んだ学習内容が記述され、「敬語は苦手で中学校や高校のテストに出たときは覚えていてもすぐに忘れてし

まっていました。なので敬語の基本をもう一度確認ができて良かったです」という感想が加えられている。二つ目や三つ目の記述にあるように授業で取り組んだことを時系列でまとめているものもあった。

さらに、半期の学習を通して得た知識を羅列しているものもあった。

- 普段、気をつけなくてもきちんとして「は」の位置や言葉の上下を正しく使っている。一つの文字でも二通りの読みがある。カップとコップの違い、「上位語」「下位語」「類義語」言葉には上下関係がある。葉書の書き方では普段めったに出さない葉書の書き方を詳しく知ることが出来、高校の時の先生に実際に書くことができた。「敬語」これはだれに対して話すのかによって使われる言葉の形が変化する。「召し上がる」「お食べになる」「食べられる」尊敬語や丁寧語の違い。尊敬語を二つ同時に使うと「二重敬語」になってしまうので要注意。「敬語」の種類は二つあって、尊敬語と謙讓語がある。動作の主体によってどっちになるのかが決まる。語彙…同義語→意味は同じだけど何かが違うもの、こんなにも沢山のことを前期で学びました。

- 漢字の読み方で、私は「三階」を「さんかい」と思っていたのですが、他の学生は「さんがい」と読んでいました。確かに考えてみると、どちらとも使われていることを知り、何げなく言っていたので、とても良い勉強になりました。カップとコップの違いをよく考えてみると、マグカップ・紙コップは正しい表現なのですが、マグカップ・紙コップとは言わないことを学び、言葉と言葉の関係を表現することができるのだと授業を通して思いました。手紙の書き方を学び、書き出しは「拝啓」から始まり、結びには「敬具」という形で終わることを勉強できて、良かったです。尊敬語・丁寧語・謙讓語を勉強し、先生や目上の人に対しては、丁寧な言葉づかいで話すことをこれからも心掛けていきたいです。尊敬語が二つ続いている形のものを二重敬語ということも学びました。大切・重要・重大の使い方にはさまざまあり、難しかったです。「みる」・「かえす」・「とる」の中での漢字の使い方がいろいろあって、本当に良い勉強になりました。

どちらの記述も半期の学習で学んだ知識を思いだし、羅列していることが分かる。特に、一つ目の記述の最後には「こんなにも沢山のことを前期で学びました」といった好意的な記述があるため、量的な自身の学びを実感しているのだといえる。

こういった羅列型の記述がある一方、個々の学習活動をマクロな視点から総合的に捉えているものがあった。こういった視点は、自身の学習をメタ的に捉える思考の萌芽であるといえる。例えば、学習活動における自身の認知過程に着目した以下のような記述がある。

- どうしてこういう言葉遣いをしているのかなど、どうしてということを考えないで使っていて、授業の中で問題を解く中で、よく考えるとどっちなんだろうと考えることが多かったです。
- この授業を受けるまで、日本語表現なんてなんでそんな基本的な所をやらないといけないのかなと思っていただけ、やってみるとその基礎すら完ペキではなかったんだと気づきました。

これらの記述に共通しているのは、授業を通してこれまで当たり前に使っていた日本語の難しさへの気づきであり、そういった気づきにいたる自身の思考過程に着目していることである。一つ目の記述では、「よく考えるとどっちなんだろうと考えることが多かったです」とあるように、認知レベルで自分がどのように学習に取り組んでいたかを視点として、学習活動における思考の共通性を指摘している。二つ目の記述では、「やってみるとその基礎すら完ペキではなかったんだと気づきました」という認知レベルでの体験が想起されている。こういったマクロな視点からの振り返りによって、当たり前に使っていた日本語の難しさという気づきを再認識しているといえる。

さらに、授業という教育的な営みと関わらせて、認知レベルで自身の学習を捉えているものもあった。

- 私は前期をふり返って、短大の授業は高校の授業とは違い自分達で考える班で話し合うというスタイルが多いなと思いました。しかし、そうすることで、言葉に出すことが出来るので、お

ぼえていられるし、理解も深まるなと思いました。

「言葉に出すことが出来るので、おぼえていられるし、理解も深まるなと思いました」というように、話し合うという学習活動が自身の学習にとってどのような効果があったのかについて捉えているのである。

ただし、マクロな視点に立ったため抽象的でとりとめのない内容になっているものもあった。

- 色々なことが学べたので良かったです。言語力がついて分かったことがたのしくなりました。
- 振り返って、この授業で学んだことは、これから生きていく中で、必要なことなので、習ったことを忘れないようにしていきたいです。
- 私は前期を振り返ってたくさんのが学べたと思いました。日本語の難しさなどを知ってもっと勉強が必要だと思いました。

このように、振り返りを行う上で、複数の学習内容を関連づける必要性がある本研究では、個々人の認識の程度によって、その記述は多様なものとなっている。

3. 「国語学習の推進力」に関する記述について

「国語学習の推進力」¹⁷に関する記述は36人中22人の振り返りに見られた。

日本語検定試験が学生にとって分かりやすい目標の一つとして設定されていたことから、それを一つの指標として、今後の取り組みが示されている。抜粋したものを以下に示す。

- 後期は、まず敬語の部分を完璧にしたいです。漢字とかは得意な方だと思うので、目上の人への対応や言葉づかいのルールを克服したいと思いました。正直、日本語検定は受かるだろうなと思っていただけ、自分の苦手な所が明らかになったので後期で克服します。
- 前期で学んだことを基本として、後期では、もっと難しい問題にチャレンジしていきたいです。私は漢字が苦手なので、なるべくわからない漢字は自分で調べるなどの努力をして頑張りたいと思っています。

○後期の授業で頑張りたいことは、日本語検定を無事に合格することができたのですが、敬語の問題ができなかったので、そのところをもっと勉強していきたくと思っています。文章を読む力を身につけていけるよう努力していきます。漢字の意味や由来などを詳しく調べて、自分で理解していけるように頑張っていきたいと思えます。

「日本語検定は受かるだろうなと思っていたけど、自分の苦手な所が明らかになったので後期で克服します」という記述が端的に示しているように、明確な目標としての日本語検定試験から自身の弱点を把握し、さらなる学習を考えているのである。「私は漢字が苦手なので、なるべくわからない漢字は自分で調べるなどの努力をして頑張っていきたいと思っています」というように、今後どのように学習に取り組むかについて主体的に目標を設定している。つまり、日本語検定試験という学生にとって分かりやすい目標が、それを一つの観点とした学習の振り返りを促しているといえる。

ただし、「日本語検定を無事に合格することができたのですが、敬語の問題ができなかったので、そのところをもっと勉強していきたくと思っています」といった記述があるように、日本語検定試験をきっかけとしながらそれに限定されない姿も見られた。

4. 「国語教室への親しみ」に関する記述について

「国語教室への親しみ」¹⁸ に関係する記述は36人中18人の学生が振り返りとして記入している。

教室への親しみを示すものは授業に対する肯定的な記述とともに、授業に取り組む際の情意面の変化として記述されていた。何らかの抵抗が解消されるという一連の経験によって、教室に対する親しみが生じているのである。抜粋したものを以下に示す。

○最初の授業では「日本語表現の時間に身につけたい日本語力はどんな力ですか」と聞かれて、難しく、この授業は大変なんだと思っていましたが、授業の回数が増えるたびに私の考えていたイメージとはまったく違って、毎回の授業が楽しく学べるようになっていました。初めての

授業でとても不安だったんですが、先生はとても優しい人で、私たちのクラスは、けっこううるさかったと思うんですけど、それでも優しく、分かりやすく教えて下さったので不安はなくなり、毎回楽しく授業を受けることができました。

○最初は分からない所も先生に聞くことが出来ないうまだったけれど、段々聞けるようになって、もっと色々な知識を入れることが出来たので良かったです。

○難しくてやだなあとと思ったけれど先生がわかりやすくみんながわかるまで説明してくれたので、無事合格できました。ありがとうございました。

IV. まとめ

本研究を通して、保育士養成課程における学生の振り返りによる多様な意味づけの様相が明らかとなった。ケーススタディではあるものの、これまで検討されていなかった保育者養成課程の短期大学生による振り返り活動について、その様相を明らかにできたことに本研究の意義が見出せる。

特に、保育者養成課程の短期大学生による振り返り活動を取り上げたことで得られた特徴的な知見として、以下の二点があげられる。これらの知見は、基礎的な日本語力を育成する科目での振り返り活動をどのように設定するかを検討する際に有効な視点となり得るものである。

第一に、「日本語表現」という直接的に保育者としての専門的な技術の育成とは結びつかない科目であっても、保育者になるというキャリアに対する意識が振り返る際の視点となっている点である。そのため、学生が学習を意味付けることを促進するためには、教師側も保育士養成課程であるということを意識した活動を設定することが必要だといえる。加えて、学生自身のキャリア意識によって学習がどのように意味づけられているかという視点は、他科目との関連を考える際にも有効な知見となる可能性がある。

第二に、短期大学生でも複数の学習内容をマクロな視点から捉えるような振り返り活動では、学習に対する個々人の認識の程度によって違いが見られるという点である。取り組んだ活動や学んだ事項が十分に自身の中で構造化されていなかったり、知識の量的な充実だけに留まっていたりする場合もある。学習全体を意味づける上での個人差

を教師側が意識して、振り返り活動を設定することが必要だといえる。

最後に、今回の分析はS短期大学での実践に基づくケーススタディであり、このような振り返りが生じた過程等について詳細な分析はできなかった。例えば、振り返りの様相と学力差との関係など改めて調査する必要がある。研究方法に関する検討もあわせて今後の課題としたい。

引用文献・注釈

- 1 例えば、高木香織. 保育者養成校における「日本語表現」の実践—大学の特色を活かす授業実践の試み—. 埼玉純真短期大学研究論文集, 2008, 1, p.65-71.
- 2 佐藤達全. 保育科学生の文章表現力について. 育英短期大学研究紀要. 2002, 19, p.69-80.
- 3 副島雪子・中島一恵. 学生の国語表現に関する報告—保育者養成の視点から—. 長崎女子短期大学紀要, 2009, 33, p.110-116.
- 4 善本孝. 保育におけるコミュニケーション—「保育士にもとめられるコミュニケーション能力に関する調査」から—. 横浜女子短期大学研究紀要, 2003, 18, p.47-67.
- 5 松崎史周. 保育者養成短期大学における国語力育成のあり方. 清泉女学院短期大学研究紀要, 2013, 31, p.1-11.
- 6 善本孝・奥泉和久・高橋和子・原真由美. 保育者養成における情報リテラシー教育の展開—「国語表現」の授業と短大図書館との連携による実践とその分析—. 横浜女子短期大学研究紀要, 2006, 21, p.1-34.
- 7 中島賢介・山森泉. 保育者養成校としての漢字教育に関する研究. 北陸学院短期大学紀要, 2006, 38, p.43-59.
- 8 細田香織. 保育者養成課程における「日本語表現」の教育内容—意見文作成から見る「書く能力」の実態と課題—. 埼玉純真短期大学研究論文集, 2011, 4, p.87-94.
- 9 佐藤達全. 保育科学生に対する作文指導の目的とその結果について—「日本語の表現法」と「保育者論」の授業を通して—. 育英短期大学研究紀要, 2013, 30, p.95-109.
- 10 佐藤達全. 保育科学生の文章表現力低下の原因と対応—日本語表現法の課題文と実習日誌を中心に—. 育英短期大学研究紀要, 2014, 31, p.57-71.
- 11 竜田徹. 構想力を育む国語教育. 溪水社, 2014. p.155.
- 12 著者の担当するクラスでは、「学習の記録」として毎回の授業の終わりに振り返りを書くことになっている。考えたことや疑問に思ったことなどを自由にかくもので、半期を通して繰り返し行っていた。
- 13 竜田徹. 構想力を育む国語教育. 溪水社, 2014. p.178.
- 14 竜田徹. 構想力を育む国語教育. 溪水社, 2014. p.180.
- 15 竜田徹. 構想力を育む国語教育. 溪水社, 2014. p.180.
- 16 竜田徹. 構想力を育む国語教育. 溪水社, 2014. p.180.
- 17 竜田徹. 構想力を育む国語教育. 溪水社, 2014. p.180.
- 18 竜田徹. 構想力を育む国語教育. 溪水社, 2014. p.180.